

七夕悲恋

kotohito

序

街の中心部から少し離れた丘の上、ひっそりと隠れるようにしてその屋敷は建っている。生垣に囲まれた庭には、美しい芝生の緑があふれ、木は形良く剪定されている。白亜の壁には、長年風に晒されたあとが見えるものの、陽光に煌めく姿は、見るものに汚いという印象を与えない。

少年が、はじめてこの屋敷に迷い込んだのは、数日前のことだった。夏の午後を照らす熱い太陽が、ほんの刹那隙を見せた、滝のような夕立。近くの森で遊んでいた少年が逃げ込んだのが、屋敷の裏手にある四阿だった。

急いで屋根のあるところを探して逃げ込んだものの、見知らぬ庭園はきちんと整備され、誰かに管理されているようにしか見えない。勝手に入り込んで良かったのだろうか？ こんな夕立すぐにあがるにきまっているから、そのまま雨に濡れていた方が良かったんじゃないだろうか？ そんな後悔の念すら抱きつつ、雨に濡れて冷える体をさすっていた。

「あら、そんなじゃ風邪をひいてしまうわ」

声が突然少年の耳に届いた。

びくっとして振り向くと、そこにはひとりの女性が立っている。年の頃は二十歳を少し過ぎたくらいだろうか。夏だというのに、黒い長袖とロングスカートで全身を覆っている。首には青い宝玉がついたペンダント。白いエプロンと白磁のような肌。その見事な対比に、少年は一瞬自分が夢の中にいるのかと思った。

「あ、あの……」

勝手に入ってすいません、だとか、すぐに出て行きます、とか、そういう言い訳が少年の口からは出てこない。いつもはあんなにすぐに謝罪の言葉が出てくるのに。

「こんなに冷たくなっているじゃない」

女性の手が、少年の腕に触れる。冷たくて、なめらかな感触。彼女の長い黒髪が、少年の頬をくすぐる。

「いらっしゃい。お風呂はすぐには無理だけど、タオルで拭くだけでもだいぶ違うのよ？」

婉然とした微笑みに、彼は彼女について行くしかできなかった。

若い女性が持つには不釣り合いな、大きな黒いこうもり傘にあたる雨の音が、少年の耳にはいつまでも残っていた。

八月もすでに一週間を過ぎていた。

真夏の太陽に照らされた街は、七夕のお祭りでにぎわっている。

そんな喧噪からは遠い森の中。少年は微かに開かれた門扉を過ぎる。芝生の間を縫うように通り抜け、厚い木の扉を敲いた。

「いらっしゃい。今日も来てくれたのね」

扉の向こうから、あの日の女性が顔を出した。あの時と同じ、肌を覆い隠す慎み深い服装。

「また来るって、言ったから……」

恥ずかしそうに、少年が答える。彼女は、それを慈悲深い表情で見守っている。

「外は暑かったですでしょう？ もう、八月も七日なのだから」

長袖の黒衣を纏う彼女は、その言葉とは裏腹に、額に汗のひとつも浮かべてはいなかった。

少年は、二階の部屋に通された。

真昼だというのに窓にはカーテンが引かれ、部屋の中は薄暗かった。

どうして、自分はまたここに来たのだろうか？ 少年は自問する。

確かに、この前来たときに、もう一度来るから、と彼女には約束した。

けれど、それは絶対に来るから、というものではなく、そのうちに来るから、という社交辞令くらいのものだったのに。

「紅茶、冷たい方で良かったわよね？」

彼女がそう言って、少年の前にグラスを置く。形の良い氷が、からりと音を立てる。

外では真夏の太陽がその存在を主張しているのにもかかわらず、部屋の中はひんやりと涼しく、少年は半袖のシャツからのぞく素肌を軽く抱いていた。

前に来たときには部屋の様子を見る余裕はなかったが、落ち着いた調度品と、外とは隔絶された雰囲気、少年はどこか遠い異国の洋館に来ているような気がした。

「……今日は、七夕なのね」

彼女が、ぽつりと言った。

「うん。街はとってもにぎわってるよ」

「あなたは行かないの？」

まっすぐに向けられる瞳。

「あんまり、人の多いところって得意じゃないから……」

恥ずかしくて、目をそらす。

「そう……ねえ、この町の七夕の話、知っている？」

「七夕の話って、織姫と彦星がっていうやつ？ それなら知ってるけど」

年に一度しか逢えない、悲しい男女の物語。

しかし、彼女は首を横に振る。

「ううん、この町に伝わる、恋人たちの物語」

何かを懐かしむような、誰かを慈しむような、そんな表情に、少年は魅了される。

「それじゃあ、話してあげる。彼と彼女の、哀れな救いの話を――」

「—それは、今からあまり遠くない昔。この国が、明治という時代になってすぐの頃。

遠くの国から、いろんな人がこの国に来たの。軍人とか、政治家とか、あるいは商人とか教師とか。今まで閉ざされていた国に興味を持ったジャーナリストとかもいたわ。

秘密のベールに閉ざされていた国は、いろんな人の好奇心を煽ったのね。

でも、この国に来たのはそういう人間たちだけではなかったの。

それまで、旧大陸や新大陸で肩身の狭い思いをしていた者たちにも、この国は魅力的だった。ここでなら、十字の影に怯えなくてもすむ、彼らはそう考えてこの国に安住の地を求めた。

そして、そのとおり、彼らはこの国で、安らぎの日々を送ることができた。それは、彼らにとって数百年ぶりに訪れる穏やかな日々だったわ。

彼と彼女も、そうしてこの国に追われてきた。

どこか、故郷を思いださせるような、そんな風土のまだ小さい村だったこの町に二人は住み始めた。まだ国を開いたばかりの土地の人たちには、彼らの姿は奇異に映った。でも、怖い、というよりも、好奇心の方が勝っていたのね。村人たちは二人の元を頻繁に訪れるようになった。そして、いろんな事を訊くの。彼らの故郷、遠い異国の話を。

彼の地でも、木々は緑色なのか？ とか、異国人はいったい何を食べているのか？ とか、もう、そんなことばかり。現代を生きるあなたにはおかしな事かもしれないけど、当時のこの国の人たちは、本当にそんなことも知らなかったのよ。

そういえば、異国の人はあなた達のように太陽が沈んでからしか出歩かないのか？ と質問されたこともあったわ。二人は困った顔をして、普通の人々は昼間も外出するが、自分たちのように夜しか外を歩かないものもいるって答えたわ。

二人は、そんな質問にも嫌な顔ひとつせず答えたわ。彼らが元々そういうことをいとわない性格だったからだけど、故郷と違い、この国の、この人たちは自分たちを温かく迎えてくれている、その思いがうれしかったのね。

うん—本当にうれしかったのね。

二人は、そんな村人たちにできる限りのことをしたわ。

村人の相談にのったり、村の特産品として、それまで細々と続いていた木工細工をうまく都会に売り出したりして。—そう、この町の特産の木工細工、彼らがいなかったらこんなに有名にはならなかったのよ？

そんなある日、村人たちは彼らに贈り物をしたわ。

それは、遠い、遠い二人の生家を思いださせるような白亜の洋館だった。

小さいけれど、二人を思う村人の暖かな気遣いに、彼らはとても喜んだ。

気さくな村人と、愛する人がいる—彼らにとって、これ以上の幸せはなかった……

でも、残念ながらそれも長くは続かなかった。

彼らを追いつけたモノは、とうとうこの極東の、小さな国にもやってきた。

遠くはるばる、旧大陸の荘厳な寺院の奥深くから。

それは、信仰の守護者。

それは、神意の代行者。

それは、魔を狩る狩人。

追われるものは、神に仇なす反逆者。

執拗に、執念深く代行者は彼らを追い続けた。

そして、とうとう村に住む二人を見つけた。

それは、突然彼らの元を訪れたわ。

一切の予告なく、全く予兆も見せずに。

雨降る夜、館の扉を突き破った彼の手には、聖水で清められた剣と、純銀の弾丸が詰まった拳銃が握られていた。

けれど、その代行者は普通の代行者じゃなかった。

そもそも、神の代行者がこんな国まで来るなんて、普通じゃなかった。

彼らが狩るべき魔は、その当時まだまだ神のお膝元であるヨーロッパ全土を跳梁跋扈していたんだから。

その神の代行者は、はぐれものだった。

神の代行者でありながら、己の行いに疑問を感じていた。

それはすなわち、神の行いに疑問を抱くということ。彼は不信心者だった。

彼は、魔を狩ることに疲れていて、それでも狩ることにしか自分の存在意義を見つけられないようなかわいそうな人だった。

それでも、二人にとっては恐ろしい代行者には変わらない。

代行者は自らの意義のために二人を狩ろうとし、男は自分たちの生活と、何よりも彼女を守ろうとして闘ったわ。

男は必死だったけれど、代行者は強かった。

二人は死力を尽くした。

銀の弾丸はとうに尽きていた。

代行者が持つ聖剣と、男が村人からもらった刀が火花を散らす。

やがて、男の手から、刀が落ちた。やはり、今まで慣れ親しんだ剣と刀じゃ勝手が違ったのね。

そして、代行者の剣は男の体に突き刺さった。

けれども、それは男を完全に滅ぼすには至らなかったわ。彼に、代行者にも男を滅ぼすほどの力は残されていなかったの。

男の肉体は滅びたけれど、精神は滅びなかった。

彼の精神は、女を守るために、代行者の前に立ちはだかった。

身体をなくしてもなお、彼の心は彼女の元を離れようとはしなかった。

代行者に、女を殺すことはできない。

それは、彼の力が尽きたからではなく、彼の心が、闘うことを拒否していたから。

彼は、剣を納めることしかできなかった。

外の雨音が響く室内。

女の嗚咽だけが響いていた。

代行者は、消えゆく男の精神を抱く彼女を、じっと見つめている。

やがて、長い逡巡を振り切るように口を開いた。

『ひとつだけ、彼を現世にとどめる手段がある』

女は、怯えた表情で代行者を見上げた。

『神の御業にすがれば、彼は年に一度だけ肉体を取り戻すことができる』

彼は静かに続けた。

『……どうすればいいの？』

女が尋ねる。

『年に一度、雨降る八月七日の夜だけ、彼は想う者の前に姿を現すことができる。その者が、神に背かぬ限り』

代行者の目が冷たい光を帯びる。

『つまりは、お前が神に傅けば良い。

神を信じろ。

神に背くな。

神に全てを捧げるのだ。

そうすれば、奇蹟は起きる』

彼の目は問いかける。

闇に生まれし者に、それができるのか？ と。

根源的な欲求を抑えることができるのか？ と。

『—わかった。あなたの神が、あの人を連れてきてくれるというのなら、私は神を信じるわ。神は私を赦してはくれないかもしれない。でも、私は祈り続ける。人の血液だって飲まない。愚かで、穢れた私でも、神が祈りを聞いてくださるのならば』

女の目は、僧女よりも純粋に、救いを求めていた。

『……神は、自らを頼る者を決して見捨てはしない。神がその怒りを下されるのは、彼に二心を抱いた者のみ。

お前は—赦されるだろう』

代行者は静かに女へと近づき、自らの首から外した、小さな青い宝玉のついたペンダントを女の首にかけた。

『それは、お前の心を写す宝玉。

汝に背信の疑い有りし時、深紅に染まりて神に知らせるであろう』

厳かな声が響く。

女は、宝玉にそっと指を這わせ、

『ありがとう』

そう、静かに言った。

代行者は、立ち去るとき女にこう尋ねた。

『自分が逝く先は、天国だろうか？ それとも地獄だろうか？』と。

彼女は、答えられなかった。

次の朝、一晩中降り続いた洒涙雨が止んだ時、女が抱いていた男の精神は霧散していった。

それから、女は屋敷から出なくなり、誰とも会わなくなった。

そしていつしか、村人たちもふたりのことを忘れていった—この国には、もっといろいろな、現実的な問題が次々と襲いかかってきたから。

そう、いろいろあったけれど、彼女はじっと待ち続けている。

己の存在が赦されること、彼の魂が救われることを神に祈りながら。

ひとりずっと、ずっと、待ち続けている。

雨降る、真夏の一夜を—」

長い話を終えて、女はゆっくりと目を閉じていた。

「……ずっと、待っているの？」

少年の前に置かれたグラスの中の氷は、すでに溶けていた。

「ええ、待っているの」

「ひとりで、寂しくないの？」

「二人が生きていくためには、もっと大変なことがたくさんあった。それに比べれば、年に一度しかあの人に会えないことも、我慢できるの」

首に下げたペンダントが青く光る。

「でも……」

少年は、何か言おうとした。

けれど、彼女の表情がそれを拒んでいた。

「さあ、だいぶ長い話をしてしまったわ。もうそろそろ帰らないとお母様が心配するわよ？」

彼女が席を立つ。

「あ、あのっ」

それでも、何か彼女に言わなくちゃ——悠久の時の中、ひとり最愛の人を待ち続けるかわいそうな人に。

「なにかしら？」

「今日——雨降るといいですね」

やっとの思いで出てきたのは、そんなありきたりの言葉でしかなかった。

「ありがとう」

それでも、彼女に少年の想いは伝わっていたのだろう。

昔、慕ってくれた村人たちに見せたのと同じ微笑みを、少年は見た。

大きな犬歯がのぞく、美しい微笑みを。

"Last Vampire Lovers" is over.